

見玉絵里子著 『初期歌舞伎・琉球宮廷舞踊の系譜考 —三葉葵紋、枝垂れ桜、藤の花—』

大城 ナミ

本書は「初期歌舞伎と琉球宮廷舞踊の共通点や相違点を考察すること」を目的とするものである。著者は、文学博士、沖縄芸能の研究者である。沖縄国際大南島文化研究所特別研究員、法政大沖縄文化研究所国内研究員など務める。紅型の研究を行っており、著書に「琉球紅型」などがある。沖縄の伝統芸能については人間国宝らに師事して学ぶ。

著者は、これまでの芸能史研究における次の3つの問題点を取り上げている。1. 初期歌舞伎の画証として絵画資料が多く取り上げられるが、舞台と劇自体の構造論が主であり、芸態の重要性の指摘が漠然としており、2. 芸態を構成する『型』そのものや演目を形作る型の内容への考察が看過されて来たこと、3. さらに、琉球舞踊においてもその芸態記録が看過されてきた。これらの問題点の解決のために、まず型としての芸態記録の必要性について述べ、次に琉球舞踊を含む総合的、かつ具体的な、芸態の比較対象研究を一括して行っている。

本書は、著者が実際に琉球舞踊を稽古した舞踊体験に基づいている点と芸態の比較研究は、図像学を基礎とした美術史研究の手法を背景としている点の特徴である。初期歌舞伎の演目として綾子舞を取り上げ、その上で琉球の宮廷舞踊が初期歌舞伎に由来するという仮説を実証しようと試みている。芸態の研究は構造論の研究に偏するのではなく、型の研究も並行して行うべきものとして型の研究の重要性を示し、芸態の共通点の究明につながるとして、比較対象研究の意義も強調されている。琉球舞踊の「若衆特牛節（こていぶし）」について、初期歌舞伎の「近世初期舞踊図」を題材とし、その扇の持ち方および姿勢を写真資料と舞踊図を豊富に用いて詳細に比較し、初期歌舞伎から琉球舞踊への系譜を指摘している。特に若衆特牛節については琉球舞踊の他の演目には見られない特有の珍しい扇の扱いと指摘されてきた“投げ扇”を、綾子舞の小歌踊・囃子舞に見いだしている。

他に取り上げられている琉球舞踊の演目としては、「上り口説」「かぎやで風」があり、江戸時代に描かれた歌舞伎舞踊図屏風や舞妓図との比較を行ない、ここでも扇の持ち方と姿勢の比較を基に

系譜の確認が行なわれている。歌舞伎の見栄（元禄見栄）において上体の捻りと軸足の推移も含めて検証され、琉球舞踊での「若衆特牛節」「二才踊り」「かぎやで風」について、一瞬の静止を伴う型の存在との共通点を見出し、その系譜が示されている。

本書全体を通して、さらなる検証を要すると思われるいくつかの表現が見られた。例えば、型・形に美を見出す感性を日本人特有のものと表現しているが、この点についてはより深い検証が必要かと思われる。その他の箇所にも同様に検証が必要と思われる記述があり、それを基に結論が導かれている箇所がいくつか見られる点が気になった。しかし、著者が示すように、本研究が芸態比較研究の基礎的方法論を確立し、新たな芸態研究の糸口となるものと思われる。これまでの琉球舞踊研究の多くは、先人からの言い伝えおよび伝承、また舞踊体験に基づくものが多いが、本研究では、複数の美術館に足を運び、所蔵されている舞踊図との比較、それを著者自身の舞踊経験を踏まえて精神的かつ丹念に思索を重ねて芸態を明らかにしていく芸態比較研究の手法が示されている。今後の琉球舞踊研究の方向性としても参考にしたい。

(錦正社, 2022)

星野幸代著『翼賛体制下のモダンダンス —厚生舞踊と「皇軍」慰問—』

垣沼 絢子

戦時研究は難しい。創作者は軍事プロパガンダとどう付き合っていたのか。創作は政治にどのように利用され、あるいは政治を利用したのか。時に無邪気な創作者の戦争協力の言説や実践に、現在の観点から問題を投げかけることはどこまで正当なのか。著者によれば、本書はそうした課題を抱えながら、翼賛体制下の舞踊を「文化的記憶」として継承するため(9)に書物として記された。

本書は、序章、第一章～第六章、終曲、資料集から成る。序章から第二章までが「総論」(第一部)、第三章から第六章までが「翼賛体制下の舞踊界」(第二部)である。第一部では当時の文化政策と舞踊の役割が、第二部では複数の舞踊団・舞踊家の戦時下舞踊公演の実際が論じられる。

序章では、戦時期研究の課題や限界、文化芸術をめぐる豊富な先行研究が概観され、本書を「文化的記憶」として文脈化するための見取り図が示される。モダンダンスのダンサーの身体が、プロパガンダとして人々の間に身体的な「共振」を促すとともに、一元化されない意味の多様性が開か

れたメディアとしても機能していたという視座が示される。意味が一元化されないというのは本書を貫く思想であり、〈踊る身体〉と〈見られる肉体〉という概念上の境界もまた、戦時期舞踊では曖昧だった。

第一章「戦時下の舞踊をめぐる文化政策——厚生運動と恤兵部」では、慰問舞踊の基盤となった厚生運動が概観される。祭礼の奉納芸能や盆踊り、民謡体操をはじめとする集団舞踊を用い、老若男女、地方文化の振興や共同体を志向する身体の「共振」活動を通して、国家の目指す方向に一致団結する国民の身体を作る試みで、モダンダンスもその一助を担った。

第二章「翼賛体制下の舞踊界」では、「第一章でみてきた機関のもとで舞踊家たちがどのように統制され、対応してきたか」(71)が論じられる。全ての国民の集団の動きと「共振」する身体を総動員体制のもとで謳いあげる「日本」三部作(1940年)の分析や、他の舞踊に比べてモダンダンスが厚生舞踊に最適として活用され、モダンダンスもそうした思想を利用して自身の身体表現を磨いていったという指摘が興味深い。

第三章「石井漠の大陸慰問」では、朝鮮人や台湾人を多く門下に持った石井漠が戦時動員のひとつとして文化交流の役を担わされ、事故後も継続して外地慰問に向かう様子がメディアを通して報道されることで、「舞踊界の重鎮としての立場と、戦うジェンダーとしての男性性を保った」と結論付けられる。同時にそれは、石井自身が「当局が求めるものを提供することで舞踊界の生き残りを図っていた」(148)姿でもあった。

第四章「大陸、南方における江口隆哉・宮操子舞踊団——戦時の語り、戦後の記憶」によれば、慰問ルポを多く残した宮は、日本に残る人々にとって、戦場の日常と、外地の人々との文化交流(大東亜構想)の可能性を、自分たちの理想通りに語ってくれる存在だった。〈踊る身体〉と〈見られる肉体〉の曖昧さも含め、著者は宮の態度を「非戦闘員ではない女性が準当事者に昇格し、銃後の非当事者と戦場とを接続する行為」(182)と分析する。

第五章「日本放送協会による皇軍慰問演芸団——石井みどり舞踊団、南方へ」によれば、慰問先でビルマの民族舞踊を習い、帰国後それを披露した石井らの文化交流の実践が国策に沿ったものでもあり、「少なくとも一部の人々の眼には、政府への舞踊の迎合であると映っていた」(214)という。石井の身体もまた、〈踊る身体〉と〈見られる肉体〉の相克の中にあった。

第六章「慰問舞踊と工場体操との親和性——石井みどり舞踊団の地方巡演」では、石井の舞踊団が、工場労働者への舞踊講習を通して国民の身体

の「共振」を促進し、バレエやレビューなど多様なバックグラウンドを持つダンサーを吸収することで「戦後文化の即戦力となる舞踊手たちに踊る場を与え、キャリアをつないだ」(238)と示される。石井は厚生運動という時制に合わせながら自身の芸術的な欲望を実現した。

終曲では、戦時下に慰問公演を行ったダンサーたちのその後が簡単にまとめられ、戦時期舞踊の歴史的な意義があげられる。戦前と戦後の連続性(アンドリュー・ゴードンが「transwar(貫戦期)」という言葉で示したような)に、評者はとりわけ関心がわいた。

本書はほかに、いくつかの上演年表や実際の写真、索引から構成されている。実態をつかむために当時の記事やインタビューが緻密に読み込まれ、当時の様子が再構成されている。著者が言う通り、「時代の生き証人がいる短い時期」はまもなく過ぎ去るばかりでなく、その証人の残したものが散逸して塵になってしまう気配がある」(285)。だからこそ、こうしてキーワードを散りばめて文化的記憶として出版されたことがありがたい。著者の単著『日中戦争下のモダンダンス——交錯するプロパガンダ』(汲古書店、2018)などと合わせて読みたい。

(汲古書店、2022)

森田真也・城田愛著 『踊る「ハワイ」・踊る「沖縄」—— フラとエイサーにみる隔たりと繋がり』

竹村 嘉晃

エメラルドグリーンに輝く海と青い空、鳥々を覆う豊かな常緑の森や可憐な花々など、自然と色彩が豊かな南国の地であるハワイと沖縄は、多くの観光客を魅了し続ける地域である。本書は、独自の伝統的な文化や歴史をもつハワイと沖縄の複雑な近代史を紐解きながら、両者を代表する民俗(民族)芸能の「フラ」と「エイサー」に焦点をあて、同時進行するグローバル化とローカル化の相互作用およびその展開の特質や緊張関係を考察するとともに、地域社会や先住民性の今日的なあり方を論じたものである。

著者が述べるように、ハワイと沖縄は、独立王国から大国への併合、移民、第二次世界大戦、米軍基地問題、観光産業主体の経済など、多くの類似点をもっている。また近代はじめには植民地的状況を経験し、もともと当地に居住していた人々がマイノリティにならざるをえない共通の経験をも有している。こうした近代以降にハワイと沖縄

が直面したグローバルな変化について、著者は、エスニシティや先住民性、地域社会などがどのように関わってきたのかという問題の所在を明示し、物理的や心理的、歴史的に存在する様々な隔たりと繋がり、社会的状況を照射しながら、文化の創造と人々のアイデンティティ生成のダイナミズムについて考察を試みている。

本書は、著者が専門とする民俗学（森田）と文化人類学（城田）のアプローチをもとに、フラとエイサーを事例の中心においた議論が展開されている。その構成は、第一部「踊る「ハワイ」——観光地をこえるフラ」と第二部「踊る「沖縄」——基地をこえるエイサー」に大別され、序章の「隔たりと繋がりを見る文化の創造とアイデンティティ生成」と終章の「地域に繋がるフラとエイサー——近代的なリズムをこえるリズム」からなっている。各章の内容は、以下の通りである。

第1部の第1章「フラの舞台へ」では、ハワイ社会とフラの基本的概要が示され、近代における変化と観光産業との関わり、当該社会におけるフラの社会的意味などについて概観している。第2章「ツーリズムをこえるフラ——聖地、観光地、主権回復運動におけるフラ」では、フラのパフォーマンスの動態と師匠である「クム・フラ」の語りを分析の主軸におき、先住民ハワイアンの主権回復運動（先住民運動）と直接的に接合するフラの実態について考察している。第3章「ブリズンとフラ——先住民ハワイアン系入所者たちの演舞」では、フラの研究としてこれまで注目されてこなかった、更生プログラムの一環として刑務所内の入所者たちが行うフラ舞台の過程に焦点をあて、先住民ハワイアンの社会的位置づけとアイデンティティの生成について検討している。

つづく第2部の第4章「エイサーの舞台へ」では、エイサーに関する基本的概要が述べられた後、戦後の変化と拡大や観光産業との関わり、さらにはエイサーのおかれている社会的意味について概観している。第5章「フェンスをこえるエイサー——戦後沖縄・千原における米軍基地と踊りの復興」では、米軍基地にのみこまれた嘉手納町千原を事例として、エイサー復興の過程、基地内での実演と地域活動、イベントなどへの参加を通じたアイデンティティの生成について考察している。第6章「オスプレイとエイサー——戦後沖縄・平敷屋における米軍港と踊りの継承」では、米軍基地に隣接するうるま市平敷屋の事例をもとに、基地内で行われる各種イベントでのエイサーの上演や地域（シマ）に伝わるエイサーの継承と実践にみる柔軟な営みについて検討されている。

フラとエイサーに関する芸能研究には十分な蓄積がある。本書は、これまでの研究において地域社会を映す真正な伝統文化として捉えられてきた

民俗（民族）芸能について、イベントや観光、米軍基地や刑務所、先住民運動や近代以降の社会変化といった現代の政治経済や社会の文脈と結びつけて論じている点にその独自性がある。そこでは、「フラ」と「エイサー」が本質化され、伝統や地域社会、先住民性と習合する一方で、多様な文脈を行き来しながら変容・拡散している動態、すなわち異種的な接合との動態や新たな展開が明らかにされている。また、本書は、フラとエイサーのパフォーマンスが当該社会の人々の間でどのように捉えられ、実践されているのかを考察することで、人々の側からのグローバル化と同時進行する再ローカル化のあり方やアイデンティティの動態をつかもうとしている。いわば、グローバル時代における身体パフォーマンスとアイデンティティをめぐるゆくえについて検討が試みられている。

フライやエイサーが上演される現場では、隔たりと繋がり、同時多層的に起こっている、と著者は主張する。そして、フラやエイサーは、単なる排他的な自己定義や社会的分断を生むものではなく、繋がりうる、共有されうる、アイデンティティを安定化させる、当事者にとって操作可能な文化的シンボルとして再生成されてきているのであると論じる（15頁）。

本書は、そうした人々の柔軟な思考と実践の軌跡を詳細な民族誌的記述と多様な事例の分析もとに描き出しており、それは民俗（民族）芸能研究に新たな視点をもたすものといえるだろう。

（明石書店、2022年）

讓原晶子著

『バレエはアラベスク

ロマン主義以前からみたバレエ作品』

安田 静

本文291頁、索引・巻末註・書誌等70頁の力作である。全十章は大まかに4つの部分に分かれており、(1) バレエにおける「タブロー」の概念（一～三章）、(2) 17世紀の宮廷バレエから18世紀の近代バレエに至るまでのバレエ「作品」の変容（四～五章）、(3) 20世紀に新しく創出された作品の形式（六～八章）、(4) 美術及び舞踊におけるアラベスクの歴史（九～十章）について、興味深い議論が次々に提示される。

「近代バレエの作品の成り立ちについて考える」にあたり、本書では「ロマン主義バレエ以前の時代に注目」していることから、バレエ史の文脈において最重要とされるノヴェールの著作『舞踊とバレエについての手紙』は勿論、美術史や演劇

史といった近接分野における様々な著作を順次取り上げながら、考察が進められてゆく。

海外まで目を向けても、今日においてなお、18世紀のバレエ史については十分に研究が進んでいるとは言い難い。また、百科全書派をはじめとする啓蒙思想家達が、演劇や舞踊に関する言説を多々残していることは知られていながら、具体的にどの著書でどのような議論が提示されていたのか、舞踊史の中で詳しく取り上げられることは稀であった。

こうした学術的背景からすると、18世紀の『百科全書』における「ヴォードヴィル」「タブロー」「ディヴェルティスマン」「バレエ」といった重要な用語の定義をはじめ、それらにまつわる同時代の議論が展開される本書からは、大いに興味がかき立てられる。

とりわけデイドロの作劇論をはじめ、ノヴェールの『手紙』に「大きな影響を与えた著作」といわれているカユザックの舞踊論『古代と現代の舞踊』（アクションを表現する舞踊“danse en action”という概念の提示）、ノヴェールと同時代人の経済学者アダム・スミスによる「無声で言語的内容を伝える」ことの可能性や効用、ルソーのモノドラマの音楽劇『ピグマリオン』や『音楽辞典』内「役者」の項目におけるオペラ俳優のパートタイム能力の重視等、注目すべき数々の重要な議論について、本書では具体的な出典を逐次明示しつつ、多角的な考察が行われており、新たな論考のための様々な糸口を見出すことができる。

また、「グロテスク」など、今日の定義や用法とは異なる用語に関する説明が丁寧に行われている。殊に「プロセニウム (proscenium)」という劇場用語については、その語源「プロスカエニウム (proscenium)」を紀元前、古代ギリシアの野外劇場（オープン舞台）の時代まで遡って紹介し、一般的に日本では「プロセニウム舞台」を「額縁舞台」と訳すことからプロセニウム＝額縁と捉えられがちなど、実際にはオープン舞台における「小屋の前の演じる場所のこと」を意味していた、と解説する。

さらに、フランス初のプロセニウム舞台であるリシュリュー枢機卿邸の劇場や英国ドルリー・レイン劇場をはじめ、様々な劇場を具体的に取り上げながら変遷を辿ってゆき、16世紀から18世紀にかけてオープン形式からプロセニウム形式へと変化して行く劇場の推移の過程を想像してゆくとともに、「劇場という鑑賞空間」において、舞台の形状が創り手及び演者と観客との関係に与えてきた影響についても考察が広げられて行く。

これらの論考の軸には20世紀のバレエ『ロミオとジュリエット』を据えつつ、ホッジズによるシェイクスピア劇上演法の研究（邦訳『絵で見る

シェイクスピアの舞台』）をはじめとする演劇史の知見を駆使し、エリザベス朝当時の舞台形状（オープン舞台）と18世紀のヴァイマル劇場（ゲートが芸術監督を務めシェイクスピア劇の上演を開始）の比較なども交えながら、広く劇場文化史としての視点から、重層的な作品分析が行われている。

一方、いくつか気になる点も残されている。前述のシェイクスピア時代の上演に関し、舞台装置に頼らず、観客の想像によって場面を組み立てる「空っぽの舞台」について論じる際に、ピーター・ブルックの著書『何もない空間』がどこにも登場していないのは残念である。舞台装置をほぼ用いない日本の伝統芸能、能・狂言については、野村萬斎による2001年のシェイクスピア劇演出の事例のみではなく、さらなる議論の展開が期待され得る。また、キリアン代表作のひとつ“Petite mort”（1991）が《プティ・モール》とカタカナ表記されているが、これはプティットゥとした方が原音に近い。そして、著者自身『『アクションバレエ』は曖昧で定義不能な概念として、バレエ史のなかで宙吊りにされている』と述べる「アクションバレエ」という用語については、なぜ、*International Encyclopedia of Dance*（1998）をはじめとする英文文献でも用いられているBallet d'action（バレエ・ダクション）をそのまま使用しなかったのか、疑問が残る。一見すると、「アクション（筋立て）」ではなく「アクション映画」のように「アクション（動き）」を重視するバレエ、と誤解されかねないからである。

とはいえ、イリ・キリアン振付への精緻な作品分析、タイトル中の「アラベスク」に関する部分など、この紹介文では取り上げきれない注目すべき論考が他にも多々ある本書では、「バレエ史の新たな見方を提示」しようとする著者の目的は十分に果たされている。

（せりか書房、2022）

金森穰著『闘う舞踊団』

岡見 さえ

金森穰（1974-）は、日本において特別な位置にある舞踊家／振付家だ。1992年に17歳で渡欧、2002年に帰国するとキリアン、フォーサイスはじめ欧州最先端の振付を熟知するダンサー／振付家として華々しい活動を展開し、ほどなく日本初となる公立劇場専属舞踊団・Noism（ノイズム）の芸術監督に就任。以来、独創的な舞踊作品を世に送り、自らも踊り、オリジナルのメソッドでダン

サーを育て、国内主要劇場はもちろん海外からも招聘される。一見すると順風満帆、しかし金森は絶えず闘っていた。本書は金森自身の語る、彼と彼の舞踊団の記録である。全体は三部で構成され、時系列に沿って金森の伝記的要素と、舞踊家、芸術監督としての「闘い」が率直に綴られる。

第Ⅰ部には、ダンスとの出会いからヨーロッパでの経験が記されている。父親（金森勢）のスタジオでジャズダンスを始め、10歳から牧阿佐美の元でバレエを学び、17歳でルードラ・ベジャール・ローザンヌに留学。日本人で初めてイリ・キリアン率いるネザーランド・ダンス・シアターⅡと契約するが、自ら辞してリヨン・オペラ座バレエ、次いでヨーテポリ・バレエへ移籍する。印象深いのは、金森の意思の強さだ。絶望的な孤独を克服し、プロになると舞踊家／振付家として成長できる場所を貪欲に求め、年功序列を重視するカンパニーに、大規模な舞踊ビジネスに、ダンサーの向上心を削ぎ得る手厚い社会保障に疑問を抱き、反発し、理想の場所へ突き進んでいく。そして舞踊界への問題意識は、日本の状況への興味に変化していく。

全体の半分以上を占める第Ⅱ部には、帰国から僅か2年後に新潟でNoismを立ち上げ、芸術監督に就任した経緯、舞踊団の歩みと芸術監督、振付家、舞踊家としての金森の葛藤が、複雑な対立の構図と共になりに具体的に記されている。

日本でさまざまなダンスの仕事に関わり、ダンサーの不安定な地位、舞踊が芸術と見做されない状況、東京至上主義、地域創造の可能性を痛感するなかで、金森は2003年に市民参加型ミュージカルの仕事で関わった、りゅーとびあ新潟市民芸術文化会館から芸術監督のオファーを受ける。演目選定程度の業務を想定していた劇場に対し、金森は芸術監督就任の条件として劇場専属舞踊団の設立を提案する。県外から招聘するイベント的な事業支出を持続的な創造と発信の場の創造に充てることで、新たな支出なしに市民に質の高い芸術を提供し、新潟から新たな舞踊文化を発信するという金森の提案は受け入れられ、2004年に新潟市民芸術文化会館の舞踊部門にNoismが誕生した。

だが前例のない試みに対して、劇場を管理する新潟市芸術文化振興財団や、地元の舞踊教室は冷ややかだった。劇場文化の革新を共に志すダンサー、振付家も現れない。舞踊団の位置づけも市民芸術文化会館の音楽・演劇と並ぶ一部門にすぎず、当初から独立の会計を持たない困難が付きまとった。稽古場の確保からダンサーの労働環境まで金森が提案を行い、専属職員も私費で東京から招き、担当職員の配置が叶ったのは3シーズン目のことだったという。職員の定期的な配置換え、財団と市の意見の相違に翻弄されつつも、Noismの活動は発展する。2009年には若手研

修生のNoism 2を設立して本格的な育成に取り組み、2019年にはキャリアを積んだ舞踊家を選抜したNoism 0を立ち上げる。

振付について語られるのも第Ⅱ部だ。公共劇場をめぐる闘いの先駆者である鈴木忠志との出会いがあり、鈴木メソッドの強靱な身体性は金森の振付にも影響を与えた。身体の各部位の回旋によってエネルギーを拮抗させ、能の身体知に発想した「極めて動的な静止状態」を出現させる「Noismメソッド」。日本的な下方への意識とアンドウダン、フォーサイスのオフバランスに想を得た水平移動の技術「シフト」を取り入れた「Noismバレエ」。国外でも上演されたNoism初期の代表作『NINA—物質化する生贄』（2005）は両メソッドの創造の過程で生まれた作品だった。

第Ⅲ部は2018年に新潟市長選挙を契機に生じた「Noism活動継続問題」から新レジデンシャル制度設立に至った内幕、舞踊団の新たなスタートと金森のヴィジョンが語られる。2022年9月の新レジデンシャル制度開始に伴い、舞踊団は国際活動部門と地域活動部門からなる2部門制のNoism Company Niigataとなり、新潟市文化政策課、財団、Noismの三者会議の定期開催と、3年から5年への芸術監督任期の延長、予算面での一定の自由を得た。芸術家（団体）への支援から、地域の専門家集団を通じて展開する政策へ。しかし金森の理想は道半ばであり、「バトンを受け取るあなたへ」という章で書物は閉じられる。Nosimは17年の歳月を経て「市の文化政策」となったのである。

2004年の舞踊団設立から「劇場文化100年構想」を提唱していた金森は、劇場が芸術の創造と発信の場となるには「三世代に及ぶ献身と継承、何より事業の継続性が必要」だと訴える。貴重な証言を同時代の私たちは受け止め、次代の糧としなければならない。

（夕書房、2022年1月刊行）

福原敏男著 『風流踊 歴史民俗画像を読み解く』

申田 紀代美

本書の考察対象は、「消え去った風流踊」と「伝承される風流踊」の二種類の風流踊である。前者は、都市部を中心に流行し、定着せず祭礼・行事が終わると瞬時に消滅し、一回性・当座性を特徴とする。後者は、祭礼や年中行事として繰り返し演じる性格を持つ。風流踊は風紀を乱すとされ、幾度も中断を余儀なくされた。民間信仰の衰退、医学の発達により途絶えた事例も多い。風流踊は本来

定着とは無縁であり、瞬時に消え、次回は趣向の反復を避けるのが風流の持つ本旨と筆者は明言する。風流踊は、変化の抑制に価値を置く文化財政の方針とは異なる性格を有している。さらに文化庁が示す「風流の精神と美意識」を体現する風流踊には多種多様な芸能が含まれ、分類が困難である。ユネスコ無形文化遺産に登録された風流踊は一部であり、これ以外も文化財的・学術的に等価であると著者は指摘する。

序章は、著者の風流踊研究の集大成といえる。風流に関する主要な研究を網羅し、風流と風流踊の概念整理を試みた。「風流」は平安時代中期から中世にかけて出現した現象であり、大田楽、太鼓踊、風流囃子物へと展開した。近世には、複数の踊り集団が掛け合い風流の趣向を競う群舞への展開を見せる。この現象は、多方に錯綜し広がるリズムの様相を呈する。内実が複雑で体系化や分類が困難なほどに、意匠を凝らし人々を驚嘆させ、風流踊は各地で消滅と出現を繰り返していった。しかし、一回性・当座性が特徴の風流踊は、自由気ままに踊られていたわけではない。群舞の掛け合い前には稽古や準備が必須であった。地縁・血縁・職縁による基盤形成を有する近世の風流踊は、ある程度統制されていたのである。

第一章から第三章までは、旧暦の盆行事に開催された風流灯籠展観と灯籠踊への展開を、近世の画像資料を参照しつつ論じている。盂蘭盆会の行事では火を焚く習慣があり、灯籠が祖霊を迎える依代とされ、献灯自体が宗教的な行為と見做されていた。中世後期に風流灯籠の展覧が習慣化し、近世へと継承される。近代になると風流灯籠の飾りは人形や造花で装飾する造形が固定化する。やがて盆灯籠の趣向は踊りの場に享受され、灯籠踊へと展開した。筆者は絵画資料に着目する。そこには灯籠を頭にかぶき、顔を覆い隠して踊る異類異形の姿が記録されている。例えば「長谷踊夜宮図」（国立歴史民俗博物館所蔵）では、踊り手が頭上の巨大な灯籠を手で支えることなく踊っている。絵画表現の誇張やデフォルメには作画意図がある。筆者によると、当時は観衆に受ける踊りが求められており、アンバランスに踊る巨大灯籠は意外性の誇張であり、踊り手にとって「重く、熱く、危ない」趣向が流行した。灯籠踊は17世紀以降次第に廃れ、京都では洛北の久多の花笠踊と八瀬の救免地踊のみとなった。

第四章では、八瀬の救免地踊について検討している。今に伝承される灯籠踊として稀有な存在であるが、従来は境内に組まれた櫓を所作なく回り歩く芸態であり、かつての風流灯籠の製作と献灯を引き継ぐ、灯籠の頭上運搬と奉納の行事であると著者は結論付けている。

第五章と第六章では風流踊の囃子に着目し、傘・

傘鉾下で歌い囃す芸態の系譜を、やすい花や祇園祭の傘鉾に見出した。近世中期以降、「口説き系音頭」の流行により盆踊の芸態は変化したが、広場での櫓回りの輪踊の形態が増加するも、傘下での音頭は継承されたことを文献史料と絵画から考証した。傘を差す盆踊の系譜を解明すべく、絵馬、掛副、挿絵をはじめ多様な形態の絵画資料と歌本を比較検討し、消滅したナデモ踊の実像を浮かび上がらせた。文献史料、画像、歌謡など複眼的に芸能を考証する重要性が示唆された。

第七章では、石川県小松市のおたびまつりの曳山行事で奉納される曳山子供歌舞伎の考察を、都市文化の表象という視点から絵番付を用いて行った。曳山子供歌舞伎は、町人の財力と職人の技術を結集した移動式四輪舞台の曳山と金沢の地芝居が融合したもので、18世紀末に誕生した。当時の全曳山を描いた絵番付「御祭礼引山之次第」、上演場面の描写を含む二木紫石「小松祭礼図」を文献史料とともに分析し、歌舞伎芸題（外題）、役名、役者名、10カ町の男児30名、女兒14名の氏名を突き止めた。絵番付は、曳山と舞台の構造、意匠、下座音楽の演奏の詳細を知る手掛かりにもなった。筆者は、歴史・民俗の価値を高める批判的な史料の読解に言及している。

「風流踊」という概念に包括される雑多で多様性に富んだ各芸能の諸相は、一回性・当座性を武器に、現れては消え、消えてはまた現れ、意表を突く趣向で衆目を集めてきた。著者は一貫して、学術的な専門用語や概念を積極的に定義せず、文献史料や画像とともにオーセンティックな先行研究を引用しつつ論を進めている。著者の慎重な態度と調査研究の立脚点が推察できる。

風流の歴史的研究の意義について、「現在の民俗芸能研究を主導」する俵木悟〔2010〕（9）を引用し、不特定多数の嗜好に左右される「風流の歴史学」は領域横断的で、「広がり志向の系譜学」ともいうべき新たな見地を開いたとの見解を紹介している。民俗芸能研究は、文化人類学、社会学を中心に領域横断的かつ現在の視点を持った問題意識を研究の俎上に載せる傾向が強まっている。これに対し、膨大な文献史料と画像資料を綿密に調査し読み解いていく著者の研究手法は、歴史に埋没した芸能の輪郭を可視化させるとともに、民俗芸能研究の文献史料に基づく実証的な研究アプローチの重要性をあらためて示したといえる。

（岩田書院、2023年2月刊行）